

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0005
東京都東大和市高木 3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU !

無料

第57号

毎月発行

発行 2017年(平成29年)2月16日 木曜日

2017年(平成29年)2月16日 木曜日

東北の経済復興着手 『東北に上場企業を 大量に産出する運動』

東北経済地盤沈下続く

3・11以前から、東北経済は長期的に低落を続けていました。五年や十年の話ではありません。もともと長い期間です。まさにこうした状況に3・11がやってきたのです。ただでさえ経済復興がむずかしいというのに、手の施しようもないとあきらめ気分が襲われるのも致し方ないと思われるかもしれません。

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、63歳、経営コンサルタント、趣味は、縄文文化研究、この2月に株式上場プロフェッショナルを養成し、IPOの経営者教育も行うスクール『IPOマスタースクール』を開校、校長就任



さらに人口調査をしても、東北から人が減り続けています。将来の話をしたら、もっと悲惨な近未来図が見えてくると誰でも思うことでしょう。この状況を打破し、東北経済を上昇トレンドに引き上げる方策は、かなり大胆で、意表をつくものとならざるをえません。

あまりにも少ない 東北の上場企業数

下の表は、東北の上場企業に関するデータです。上場企業とは、東京、大阪、名古屋、福岡、札幌の各証券市場に上場している企業であり、複数の取引所に上場している場合は1社として計算しています。その数を見ると、あらためて東北経済の地盤沈下が想像以上にひどいものであることが分かります。東北六県合わせても、上場企業数の全国シェアわずか「1.43%」。人口十万人あたりの上場企業比率の全国都道府県ラ

ンキングでは、各県とも最下位近辺を占め、最高の宮城県でもやっと二十六位で真ん中より少し下程度というありさまで。これが現在の東北の経済力のバロメーターです。かつ、東京、大阪、名古屋は別格として、大都市圏だけに偏っているかという点でもなく、前記ランキングでは、石川県が五位、富山県が六位、福井県が九位と、北陸地方が健闘しているの、地方がまったくダメだと言う言わわけでもありません。東北がここの他低いのです。ですから、このデータは、経済状況が悪いというだけでは説明がつかいません。

いまずぐ行動を!

論評の時期は過ぎました。具体的で効果的な行動に移さなければならぬ時期はもうとっくに到来しております。そこで、当新聞ができること、筆者が出来ることを行動に移すことにいたしました。それを示します。『東北に上場企業を大量に産出する運動』

上場会社出現による 経済効果

上場会社が一社出現することによる経済効果は一概には言えませんが、それまで流通していなかった会社の株式が市場に出現する効果は、数十億円規模から数百億円規模、巨大企業となれば数千億円規模にもなります。これが突然世の中に出現するのが新規株式上場というものです。

この会社の株式売却により、企業を中心に、巨額のお金が回転し始めるのです。取引先も仕入先も、この企業の成長に呼応して成長していきます。成長に連れて雇用も拡大していきます。こうした効果が波状的に広がっていくのが新規株式上場です。政府や地方自治体の助成金と異なり、こちらはすべて民間資金であり、その経済効果は、会社が成長する限り継続します。これを東北に大量に生み出すという計画です。

上場企業を産み出す 経営者教育

通常は、最初に未上場企業の経営者が上場を決意するところから始まるのですが、東北の場合は、それ以前

【東北の上場企業関連データ】 (2016.8.31 時点データ)

- 1.東北6県上場企業数 51社
- 2.全国3564社—東北6県シェアはわずか1.43%
- 3.人口10万人あたり上場企業都道府県ランキング
 - ① 青森県 45位 4社上場
 - ② 秋田県 40位 4社上場
 - ③ 岩手県 44位 4社上場
 - ④ 山形県 32位 8社上場
 - ⑤ 宮城県 26位 21社上場
 - ⑥ 福島県 36位 10社上場

株式上場プロの養成

未上場会社の経営者とともに、株式上場を目指す株式上場プロの養成も同様に、東北では株式上場の機会がほとんどないので、この株式上場教育から開始すべきと考えます。この職業は、株式上場にとつてはなくてはならないものです。どんなに企業経営者が上場したくとも、この人材がいなければ無理です。

東北経済人ネットワーク で運動を盛り上げる

この運動を筆者単独で、当新聞でのキャンペーンを使って展開することは不可能です。しかしかなり運動は限定的となります。そこで、東北経済人団体

IPOマスタースクール

IPO マスターという仕事を広く認知させ確たる職業にすること、および成功するIPOを増産すること、特に東北経済活性化に向けて、東北での活動活性化を目標に掲げて2017年2月に開校入校対象者は、IPO マスター(株式上場スペシャリスト)を目指す人および成功IPOを目指したい企業経営者等



なんと17 銘柄、東北地酒ラインアップ

今回は満6年目の3・11開催
一か月前にもかかわらず
大勢の参加者殺到中
第25回三陸酒海鮮会も盛況

第二十五回三陸酒海鮮会・渋谷は、年明けの一月二十一日に開催されました。久方ぶりに二十四名という大勢のみなさんご参加をいただきました。この紙面をお借りして御礼申し上げます。

また、参加者の裾野はますます拡大しており、3・11から満六年を迎えようとしているこの時期ですが、この会を継続してきてほんとによかったと思います。海鮮の美味しさは言うまでもなく、東北地酒は十七銘柄というすごいラインアップとなりました。少しづつ

ついただいてもとても全部飲める量ではありませんでした。今回の開催は、畏れ多くも満六年目の3・11となりました。これまで、ほぼ一ヶ月半に一度の割合で開催してまいりましたが、そのスケジュールと重なったことで、足かけ四年になります。初めのことです。たたいま参加者を募集中ですが、参加希望者が殺到して、お店を貸切にするほどとなっております。どうぞみなさんもぜひお出かけください。



豪華な刺身



おいしい海鮮鍋



第30回 水産業再興のための料理レシピ紹介
疲労回復！旬の牡蠣を使った
《牡蠣のカレースープ》



完成品



郷土料理愛好家
松本由美子氏

一簡単レシピ

【材料2人分】 牡蠣 200g、玉ねぎ(みじんぎり)1/3(100g)、ニンニク(みじんぎり)1かけ、生姜(薄切り) 1枚、ベーコン(5ミリに切る)2枚 40g、じゃがいも(ひとくち大に切る)2個 150g、トマト(くし形に切る)、オリーブ油 小2、カレー粉大1 1/3(8g)、白ワイン・薄口醤油各大1、みりん 小1、塩 少々、片栗粉・三つ葉 各少々、水カップ2、コンソメ大1

【作り方】 ①牡蠣は、塩水で洗って軽く水をふく。②油を熱して、玉ねぎ、ニンニク、生姜、ベーコンを炒め、しんなりしたらカレー粉を振り入れ、全体に混ぜ込むように軽く炒める。③水2カップとじゃがいも、トマトを加え中火で5分ほど煮る。カレー粉で調味する。味が足りなければ、コンソメ顆粒を加える。④じゃがいもが柔らかくなったら牡蠣に片栗粉を薄くまぶし加え、軽くひと煮したら火を止め三つ葉を散らす。

旬の牡蠣(タウリン)とニンニク、玉ねぎ(アリシン)と一緒に摂り血流をアップで、元気に冬を乗り越えましょう！

写真でお伝えする 東北の郷土芸能(鹿)

写真撮影:尾崎匠



これがらびのまじらへん 地域づくり

「地域包括ケアシステム」から「地域共生社会」へ

「地域包括ケアシステム」については、「東北復興第55号で取り上げた。いわゆる「団塊の世代」が75歳以上となる2025年を目途に、たとえ重度な要介護状態となつても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される仕組みを市町村ごとに構築するというものである。

その実現のための取り組みが現在、全国各地で行われているが、さらに厚生労働省では現在、この「地域包括ケアシステム」を深化させ、「地域共生社会」の実現を目指している。これは「高齢者・障害者・子どもなど全ての人が、一人ひとりの暮らしと生きがいを、ともに創り、高め合う社会とすることで、その一環として主に地域の高齢者を想定し

ていた「地域包括ケアシステム」から一歩進めて、これまで高齢者、障害者、子どもなど対象者ごとに「タテワリ」だった福祉サービスを「まるごと」へと転換することが想定されている。

「一億総活躍社会」づくりが進められる中で、今後は福祉分野においても「支え手側」と「受け手側」に分かれるのではなく、地域のあらゆる住民が役割を持ち、支え合いながら、自分らしく活躍できる地域コミュニティを育成し、公的な福祉サービスと協働して助け合いながら暮らすことのできる社会づくりが必要だということ、そのために「他人事」になりがちな地域づくりを地域住民が「我が事」として主体的に取り組める仕組みを作るとともに、市町村においてそうした地域づくりの取組の支援と公的な福祉サービスへのつなぎを含めた「丸ごと」の総合相談支援の体制整備を進める必要があるとされる。

では、「担い手」として何をすべきなのか。それは、端的に言えば、互いにつながり、支え合うことである。第55号で「第4回町内・集落福祉全国サミット in 奥会津」の基調講演で、内閣官房の「まち・ひと・しごと創生本部」で総括官を務めた山崎史郎氏が『地域づくり』と「人の支え合い」は、実は同じことを言っている」と述べていたことを紹介したが、これはまさにそのことを指している。

山崎氏は厚生労働省時代に介護保険法の成立から実施、改正まで関わり、「ミスター介護保険」との異名を

持つ人だが、その山崎氏はこの後の基調鼎談で、「介護保険サービスは、都市部はともかく、地方ではメリックトだけではなかったのではなかいか」とも語った。また、省内の若い職員には、「介護保険のことが分らない」とアドバイスしていたというエピソードも披露している。介護保険の「生みの親」自らが、介護保険の下で専門職が提供するサービスについて、自己反省とも取れる見方をしているのである。

何が反省材料なのかと言えば、それは介護が必要な人への支え合いを全て介護保険サービスに委ねてしまつたことが地域のつながりを切り、お互いの支え合いを弱めてしまつたのではないかと、ということである。

もちろん、そうしたことから年々膨らむ介護給付費が国の財政を圧迫しているという側面もある。このままでは団塊の世代が75歳以上となる2025年には介護保険制度が立ち行かなくなるのではないかとという危機感が国にはある。ただ、そうしたことだけではなく、自分たちの住んでいる地域へのコミットメントこそが人口減少を伴う超高齢社会におけるこれからのまちづくり、地域づくりにおいて重要なポイントだということ、第55号で紹介した奥会津の方々の言葉から如実に窺える。

介護保険への反省

さて、長々と国の動向について紹介してきたが、考えておく必要があることは、これからのまちづくり、地域づくりは、単に地域に賑わいを増やす、交流人口を増やす、といったような方針に代表されるような活性化された地域をつくるということではなく、その地域の人が住み慣れた自分たちの地域でこれからも暮らし続けることができる地域をつくる、という方向に舵を切り始めたということである。そしてまた、他ならぬその地域に住む一人ひとりが、そのために「他人事」ではなく「自分事」として取り組むべきことである。

去る2月2日、仙台市内で「第1回宮城発これからの福祉を考える全国セミナー」が開催された。現在、新しい介護予防・日常生活支援総合事業の創設、包括的支援事業の充実を柱とする新しい地域支援事業への対応に各市区町村は追われている。新しい介護予防・日常生活支援総合事業においては、これまで介護保険サービスとして提供されていた要支援1、2の高齢者への訪問、通所といった介護予防サービスの大半が市町村の事業として移行されることになっているが、そのうちの「B類型」のサービスなど、「住民主体の自主活動として行う生活援助等(訪問型サービス)」「体操運動等の活動など、自主的な通いの場(通所型サービス)」と規定されているのである。

この日の全国セミナーでは、そうした制度変更を踏まえて、今後どのようにまちづくり、地域づくりを進めていくか、各自自治体におけるこれまでの取り組み事例などが発表されたが、地域の住民が互いに助け合い、支え合う地域をつくるの復興プロセスの中にもある。

宮城県保健福祉部長寿社会政策課長の成田美子氏は、「震災支援・支え合いのノウハウを地域包括ケアに活かす、発信していく」と述べたが、宮城県サポートセンター支援事務所の鈴木守幸氏も、「宮城は震災で多くのものを失ったが、地域力や住民力といった財産を得た」と指摘した。1月21、22日にやはり仙台市内で開催された「第5回日本公衆衛生看護学会学術集会」の基調講演で東北大学大学院医学系研究科教授の辻一郎氏も、地縁・血縁から「知縁」ということで、「共通の興味・関心・利害で結ばれる人間関係が重要」として、「家族でない人が同居・隣居して助け合っていく新しい形の介護・看取りが必要」と、震災のプレハブ仮設住宅にそのヒントがある」と強調していた。

ただ、こうした地域における助け合い、支え合いは震災を契機に生まれたものではない。辻氏は震災直後に支援に入った避難所での体験を紹介しながら、「東日本大震災の被災地では『地獄』の中で人々が『天国』を創出していた」と評しつつ、「それができたのは人と人とのつながりがあったため」としていた。そうした元からこの地域にあった「人と人とのつながり」という「ソーシャル・キャピタル」こそが復興・再生を助けてくれるものであったわけである。全国セミナーにおいて実際に支援に当たっている当事者の発表からもそのことが強く感じられた。南三陸町社会福祉協議会で生活支援コーディネーターを務める芳賀裕子氏も「つながりづくりがこれからのまちづくり」と強調した。石巻市社会福祉協議会で地域福祉コーディネーターを務めている小松沙織氏は「地域のチカラは、誰かを想う気持ち、喜びや困りごとに共感する気持ち、そうした想いから生まれる。それは昔も今もこれからも変わらない」と述べた。東北福祉大学総合マネジメント学部教授の高橋誠一氏も、「住民ができることを(専門職が)邪魔しなければいろいろ発展がある」として、そうした地域の「お宝」を探ることが重要であると指摘した。仙台の小松島地域包括支援センターの生活支援コーディネーターである岩井直子氏も、「地域の一人ひとりが『宝箱』を持つていた」として、地域の人のそれまでの人生経験が地域づくりのアイディアに活かされていることを小松島地域での実例を通して紹介していた。北上市保健福祉部長寿介護課包括支援係主任の高橋直子氏も、「新しい事業に取り組むのではなく、今ある自治・互助を活かしてよりよい形にしていく」と述べた。

「地域づくり」が接剤となつて切れ目なく連携していく。そして、豊かな緑を茂らせるどっしりとした大樹のような地域がで

きるわけである。その土台となる根つこの部分はその地域に住む一人ひとりである。時代が変化し、その都度生じる課題に柔軟に対応しつつも、助け合い、支え合いといったこれまでこの地域に大事に受け継がれてきたものについては、揺らぐことなく次の世代に伝えていく。そうした先に、これからのまちづくり、地域づくりがある。

2月1日に開催された塩釜医師会の在宅医療研修会でも、東京大学恒例社会総合研究機構特任教授の辻哲夫氏は、「地域の中で皆で役割分担すれば、住み心地のいいまちになる」として、そのようにして「できる限り元気で働いて、住んで、弱つても安心できる地域」があれば「超高齢社会は決して恐れることはない」と強調した。その上で、「地方は人と人のまわりがある。大都市は危うい。地方からまちづくりをして日本の未来をつくってほしい。地方は地域包括ケアシステムにより近い距離にある」と、この地域にエールを送ってくれた。

大都市圏と地方との格差のことばかり話題になるが、ことまちづくり、地域づくりに関しては、地方はトッランナーとしてその先頭を走っていることを我々はもつと誇りに思つてもいい。そして、その上で自分たちの住む地域をもつといいものにしていくための歩みを続けていけばよいのである。

大友浩平 (おともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagmasi/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.otomo

震災の前からあった助け合い、支え合い

この日の全国セミナーでは、そうした制度変更を踏まえて、今後どのようにまちづくり、地域づくりを進めていくか、各自自治体におけるこれまでの取り組み事例などが発表されたが、地域の住民が互いに助け合い、支え合う地域をつくるの復興プロセスの中にもある。

宮城県保健福祉部長寿社会政策課長の成田美子氏は、「震災支援・支え合いのノウハウを地域包括ケアに活かす、発信していく」と述べたが、宮城県サポートセンター支援事務所の鈴木守幸氏も、「宮城は震災で多くのものを失ったが、地域力や住民力といった財産を得た」と指摘した。1月21、22日にやはり仙台市内で開催された「第5回日本公衆衛生看護学会学術集会」の基調講演で東北大学大学院医学系研究科教授の辻一郎氏も、地縁・血縁から「知縁」ということで、「共通の興味・関心・利害で結ばれる人間関係が重要」として、「家族でない人が同居・隣居して助け合っていく新しい形の介護・看取りが必要」と、震災のプレハブ仮設住宅にそのヒントがある」と強調していた。

ただ、こうした地域における助け合い、支え合いは震災を契機に生まれたものではない。辻氏は震災直後に支援に入った避難所での体験を紹介しながら、「東日本大震災の被災地では『地獄』の中で人々が『天国』を創出していた」と評しつつ、「それができたのは人と人とのつながりがあったため」としていた。そうした元からこの地域にあった「人と人とのつながり」という「ソーシャル・キャピタル」こそが復興・再生を助けてくれるものであったわけである。全国セミナーにおいて実際に支援に当たっている当事者の発表からもそのことが強く感じられた。南三陸町社会福祉協議会で生活支援コーディネーターを務める芳賀裕子氏も「つながりづくりがこれからのまちづくり」と強調した。石巻市社会福祉協議会で地域福祉コーディネーターを務めている小松沙織氏は「地域のチカラは、誰かを想う気持ち、喜びや困りごとに共感する気持ち、そうした想いから生まれる。それは昔も今もこれからも変わらない」と述べた。東北福祉大学総合マネジメント学部教授の高橋誠一氏も、「住民ができることを(専門職が)邪魔しなければいろいろ発展がある」として、そうした地域の「お宝」を探ることが重要であると指摘した。仙台の小松島地域包括支援センターの生活支援コーディネーターである岩井直子氏も、「地域の一人ひとりが『宝箱』を持つていた」として、地域の人のそれまでの人生経験が地域づくりのアイディアに活かされていることを小松島地域での実例を通して紹介していた。北上市保健福祉部長寿介護課包括支援係主任の高橋直子氏も、「新しい事業に取り組むのではなく、今ある自治・互助を活かしてよりよい形にしていく」と述べた。

大都市圏と地方との格差のことばかり話題になるが、ことまちづくり、地域づくりに関しては、地方はトッランナーとしてその先頭を走っていることを我々はもつと誇りに思つてもいい。そして、その上で自分たちの住む地域をもつといいものにしていくための歩みを続けていけばよいのである。

大友浩平 (おともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagmasi/

大友浩平 (おともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagmasi/

大友浩平 (おともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagmasi/

大友浩平 (おともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagmasi/

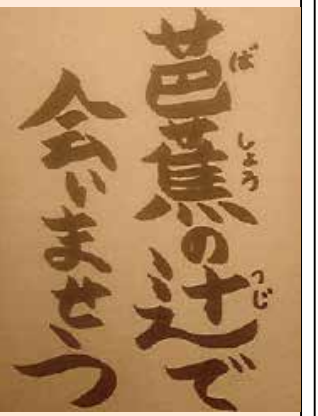
大友浩平 (おともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagmasi/

大友浩平 (おともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagmasi/

地方こそ地域づくりのトッランナー

大友浩平 (おともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagmasi/

連載
むかしばなし



第四十五話
「北都、出現」

今、広瀬川には水の流れの跡だけがあり、巨大な蛇行する道を形成していた。

皆の山の南を横切る深い裂け目から、鳥たちが変身した一万騎近い兵団が現れ、乾いた川床を踏みしめて進軍を始めた。目指すは南方河の水が化身して龍が横たわる所・・・そこに源頼朝が待っている。こちらの十倍近い軍勢を従えて・・・

「綾糟！龍の耳元にイアンパヌがいるぞ。何か、龍にさせるつもりだ・・・」
「大カモシカに鞍を置いたチャンネルラが言い、ハッと感づいた綾糟は叫んだ。



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出だし演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当

「川床を避けよ！左岸へ速やかに寄れ・・・」
蛇行した川岸の高みに駆け上がった軍団は、そこから南東の方角を見上げ騒然となった。巨大な銀色の龍が、頭を高くもたげ、その長大な身体を空へ空へと伸ばして行くのだ。その長い耳の上に、一人の甲冑姿の女が乗っているのを、綾糟は確かに見止めた。

「壁が・・・解かれるぞ！今こそ渡る時。全軍、進め」
頼朝は声を張り上げた。命令は重臣らによつて繰り返され伝えられ、軍団に広く行き渡る。混乱の中に入った武士らはオーオと雄叫びを合わせ、やがて一斉に川床へ走り込んでいった。空中に伸びた龍の頭が、ぐいと方向を変えてまっすぐ頼朝の軍団を見下ろす。夜闇に銀鱗の煌く腹が動き、喉元までぐるぐると不吉な音が駆け上ったかと思つた次の瞬間、耳まで裂けた口から夥しい水が滝の如く噴出して兵らを襲った。

「おのれ、又太郎！何をしている、化け物を退治してみせるのではないのか？」
足利義兼が罵る。

「黙って見ておれ！護法よ・・・くそ、あいつどこに」
水浸しになった又太郎忠綱が家来の姿を探す。

「名取太郎、名取太郎よ」
龍の耳の上にいる、女武者イアンパヌが地上に向かつて囁いている。
「知っているぞ・・・お前がその人形の姿を借りてここまで来た事を。さあ、我が夫・大天狗綾糟と、今こそ積年の決着をつけるかい」

護法の身体が、大きく揺られて地響きのような音を周囲に轟かせた。骨と骨の強烈な摩擦が起き、眩い火花がその甲冑を包んだ次の瞬間、一つにまとめられた火が禍々しい光線となって龍に向かつて走り、目も眩むような爆発が起こった。

「おのれ、又太郎！何をしている、化け物を退治してみせるのではないのか？」
足利義兼が罵る。

「藤足利か・・・鎌倉の配下は押し並べて皆敵なり」
大河太郎なる武者が指を立てて空を切り、何か呪文を唱える様子を見せた。

「護法め・・・俺が命じもしないのに、どうして？」
そう洩らしながら対岸の方を見た又太郎は、龍の身体の変化に気づいて慌てた。

「いやあ！護法、助けろ」
いい終わらぬうちに、龍の身体は一瞬で大量の水に戻り、姿を現した広瀬川は軍団をたちまち押し流した。必死の思いで又太郎が片手で何かに掴まると、それは釣竿のように長く伸びた護法の骨の構造物だった。

「護法め・・・俺が命じもしないのに、どうして？」
そう洩らしながら対岸の方を見た又太郎は、龍の身体の変化に気づいて慌てた。

「覚悟せよ！坂東無頼」
水面から顔を上げた又太郎が見たのは、武者の周囲一帯の地面から霜柱の如く出現し伸び上がる刀の抜き身の群れ。異様な光景だ。

「おのれ、羅刹の使いとやら。これが見えぬか・・・韋駄天じゃないな、もうこれは何だ・・・金剛力士だぞ多分」
又太郎は高みから見下ろして言い放つ。

「我が秀郷流足利又太郎忠綱。悪い事は言わぬ・・・降伏せよ。この地、宮城野は平泉殿と同族の拙僧が無傷にて貰い受ける故。」

「我が秀郷流足利又太郎忠綱。悪い事は言わぬ・・・降伏せよ。この地、宮城野は平泉殿と同族の拙僧が無傷にて貰い受ける故。」

「どうなっているのだ・・・この皆、意志を持っているのか」
盲目のチャンネルラが言う。

「塩竈社から、烏鬼森まで張られた結界のせいだ・・・この真上を通っている。強力な魔法陣なんだ。」
「解いてほしいの？」
突然、初めて聞く女の声

「おのれ、羅刹の使いとやら。これが見えぬか・・・韋駄天じゃないな、もうこれは何だ・・・金剛力士だぞ多分」
又太郎は高みから見下ろして言い放つ。

「我が秀郷流足利又太郎忠綱。悪い事は言わぬ・・・降伏せよ。この地、宮城野は平泉殿と同族の拙僧が無傷にて貰い受ける故。」

「拙僧らの建てた結界が有効なら・・・もう一つは無効になってしまふのでは？」
芭蕉が問うた。

「六角形が完成するまでは息子の結界は崩れない」
「イアンパヌ・・・貴女は一体、どうやって・・・」
「私の身体は、ずっとこの皆の下に囚われていた。そこへ息子の結界の壁が降りてきたのよ・・・私はとにかくヨが低い声で出迎える。

「おのれ、羅刹の使いとやら。これが見えぬか・・・韋駄天じゃないな、もうこれは何だ・・・金剛力士だぞ多分」
又太郎は高みから見下ろして言い放つ。

「我が秀郷流足利又太郎忠綱。悪い事は言わぬ・・・降伏せよ。この地、宮城野は平泉殿と同族の拙僧が無傷にて貰い受ける故。」

「おのれ、羅刹の使いとやら。これが見えぬか・・・韋駄天じゃないな、もうこれは何だ・・・金剛力士だぞ多分」
又太郎は高みから見下ろして言い放つ。

「おのれ、羅刹の使いとやら。これが見えぬか・・・韋駄天じゃないな、もうこれは何だ・・・金剛力士だぞ多分」
又太郎は高みから見下ろして言い放つ。

「おのれ、羅刹の使いとやら。これが見えぬか・・・韋駄天じゃないな、もうこれは何だ・・・金剛力士だぞ多分」
又太郎は高みから見下ろして言い放つ。

「おのれ、羅刹の使いとやら。これが見えぬか・・・韋駄天じゃないな、もうこれは何だ・・・金剛力士だぞ多分」
又太郎は高みから見下ろして言い放つ。

「おのれ、羅刹の使いとやら。これが見えぬか・・・韋駄天じゃないな、もうこれは何だ・・・金剛力士だぞ多分」
又太郎は高みから見下ろして言い放つ。

「おのれ、羅刹の使いとやら。これが見えぬか・・・韋駄天じゃないな、もうこれは何だ・・・金剛力士だぞ多分」
又太郎は高みから見下ろして言い放つ。

「おのれ、羅刹の使いとやら。これが見えぬか・・・韋駄天じゃないな、もうこれは何だ・・・金剛力士だぞ多分」
又太郎は高みから見下ろして言い放つ。

「おのれ、羅刹の使いとやら。これが見えぬか・・・韋駄天じゃないな、もうこれは何だ・・・金剛力士だぞ多分」
又太郎は高みから見下ろして言い放つ。

シリーズ 遠野の自然
「遠野の立春」
遠野 1000 景より



厳冬の手水

暦では「立春」を迎えましたが、さほど遠野は、この季節が最も寒さが厳しい時期です。今月号は、そんな寒さを感じさせる写真を多く取り上げました。

遠野といえは、顔が赤いカッパですが、このカッパも凍りついています。でも、口から水を吐き出す仕事は忘れません。
* 変形つらは、まるでエ



雨だれがつららに



どんと祭にて

イリアンの牙です。洞窟内のつららも同じです。雨だれがつららになるなんて、なんと寒いこと。氷筥などめったに見られ

ません。描き、不思議な世界です。そんな世界に、どんと祭の炎はあったかい。この炎で炙った餅を食べると風邪を引かないそうです。最後は恐ろしいなゲゲの木。妖怪が出現しそうです。



氷筥



仙人池斜陽



誰が名付けたかゲゲの木



変形つらら



洞窟内のつらら



閑上港神社から閑上港を望む

**写真でたどる被災地のあの時
(宮城県名取市閑上)**
当新聞第23号 2014.4.16 発行



見渡すかぎり広がる荒れ野



再建された「閑上港神社」と「富主姫神社」



工事用クレーンが林立する閑上港遠景



放置された寺



倒壊した墓石と墓参りの人々



津波に破壊された街灯の鉄製支柱

**写真でたどる被災地のあの時
(宮城県ゆりあげ港朝市)**
当新聞第23号 2014.4.16 発行



当時有名だった「ゆりあげ港朝市」



大槌漁港近辺 震災直後のまま

**写真でたどる被災地のあの時
（岩手県大槌町）**
当新聞第29号 2014.10.16 発行



大槌漁港



大槌福幸きりり商店街



取り壊しが決まった大槌町役場

**写真でたどる被災地のあの時
（岩手県大槌は祭で復興）**
当新聞第29号 2014.10.16 発行



ガレキのなかを練り歩く山車



大槌稲荷神社鳥居と計画盛土高さ表示



向川原虎舞 状況が厳しくなるなかでの奉納



岩間ご夫妻 祭りの直前に重大な決断をしていたが、そんな様子は微塵も見せなかった